

十月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

メダカ六首

高野 公彦 千葉

大江氏と坂本氏逝き「非戦」「非核」言ふ人減りし寡黙列島
車内いま（スマホ森林公園）となりて静かに地下走りをり
箸入れて奴豆腐のやはらかさ楽しむ今年サンジュー一歳
人は生きて老いて皆死ぬそのさまを子らに見られて生きゆく我か
生まれ来しメダカ数へて六匹と言へり歌馬鹿われは

草むらへ

田宮 朋子 新潟

額あちさる手毬あちさる咲き満ちて玄関までの道をせばめる
内臓の一部のやうな身を伸ばし大かたつむり石段を這ふ
鬼灯の實の生るくらき草むらへぬぬ、ぬぬぬぬと蛇かくれゆく
真夜中の覚めたる耳にこつこつと聞こえるのは時の足音
黄と黒の大虎運輸のトラックに追ひ抜かれたり夏雲の下

この夏

水上 芙季 神奈川

ミルクの香あまく沈もるリビングにわが児と眠るメンダコのごと
椀の水に浮きたるオリブ油と綿棒 いいよ夜中に泣きだしたつて
「また明日」と夫に言ふときその明日は三時間後の（ミルクの時間）
影絵劇見ること見をり同僚が送ってくれたる人事情報
この夏が暑かつたこと電気代すごかつたこときみがゐること
すもも祭り
小島 な お*東京

府中行きバスに眠れり帯の見る蛇腹の夢に折り畳まれて
すもも祭りに並ぶすももを指さして病めるときも健やかなるときも
千円が羽根の軽さに落ちてゆく賽銭箱は信用に足る
参道はまつすく続く 駄目になる 駄目になっても許される夏
足裏は下駄の木目を踏みしめる木目には木の後悔がある

☆

☆



水島晴子 兵庫

森重香代子 山口

みづからを蔑むおもひふつふつと藁嚙むごとしこの索漠は
訴へや説明のこゑ湧きのぼる病室の底にひとり沈める

ID 票手首からみ曖昧な時間つらなる病室の午後

夏至きのふ過ぎしばかりを窓へなるタイルのおもて早や夕翳る
補聴器をつければ直にとどき来も今日を離せる朝の蟬声

武田弘之 神奈川

日影康子 富山

詠みいでし歌を煙草の箱に書き戦地へ発てり無名兵士は
行く先を秘めたる船に乗り込むと詠ひ残せり無名兵士は

支那事変従軍中に詠まれたる無名兵士の歌みな悲し

宮柁二先生に叱られし思ひ出を言へば羨しと今の人言ふ
身は日々に衰へゆかめ歌詠まん思ひは熱し卒寿を過ぎて

奥村晃 作* 東京

影山一男 千葉

左手の中指がバネ指となり酷使してたとある日気付いた
バネ指で曲がった第二関節を右の指もてパキンと起こす
八十六になって初めて知りましたバネ指と言う病があると
左手の中指がバネ指となり治りにくそう色々しても

キーボード打つやバネ指痛むけど致し方なし作業続ける

咲き終へてながき日を経し紫陽花が草のいろして陽を浴みてをり
思ひきりわれに打たれてのひらに黒点となる蛎の亡骸
家門に老木となりて堅き実を馬酔木は掲ぐ梅雨降り止まず
娘がくれし雷鳥の子の縫ひぐるみ梅雨の机に据ゑて籠もれり
じわじわと家の法面くだりゆく水を怖るる梅雨降りつづく

寺内の障子をすべて張り替へて夫の一周忌ま近となりぬ

一人づつわれらと呼びて宮先生はうた詠む心得を論し下されき
才に依りうた詠むなかれもつと苦しめの宮先生の言葉忘れず
お元氣な宮先生を記憶するただ一人のわれコスモス富山支部
親しかりし師も友人らも逝きまして「よはひ齡」は「孤独」の代名詞と知る

新しきスーツなきまま暗がりをかかへ熱する洋服箆筒

ネクタイを結ぶこともうなくなりて冷えびえとある首を撫づるも
フェルメールの光と影を思ひつつ歩む葉月の神保町露地

似たやうな1LDKマンションが建ち並びぬて街の香は消ゆ
四十年働ききしが街変りおいてけぼりのまま日暮れ来る

桑原正紀 東京

免許証更新前に認知症検査うけよとお達しが来ぬ
園児向けの知能検査のごときものやらされてをり老い三十人
超易しい知的作業をしつつ怖るやがて難渋する日の来むを
記憶力テストに空欄ふたつみつ残りししを人知れず恥ぢたり
確実に衰へてゐるわが脳を灼かれつつ炎暑の道を帰りぬ

狩野一男 東京

揺れてゐるあぢさゐる見ればゆれやまぬあぢさゐるの群れ 自由貴し
咲きそめし百日紅のくれなるは咲きそめしまま七月なかば
くれなるの金の百日紅のした健気いろいろ百日草は
潔白を証明するはむづかしくばわあつと咲けり白さるすべり
あのイヤな思ひ出ゆゑに人生の締めのエリアで我はたたかふ

宮里信輝 神奈川

厚木市の「森林づくりボランティア」の活動日今日「天気快晴」
天気晴れ今日の参加者は十名なり活動前のラジオ体操
倉庫よりチェンソーと刈払機数台かついで活動場所へ
厚木市の「七沢森林公園」の林道整備がわれらの仕事
林道の雑草刈と伸びすぎた樹木整理せり約二十年

小島ゆかり 東京

あぢさゐるはいま枯れ盛り粗塩のざりざりひかる夏の陽そそぐ
枇杷たべて枇杷うまければけふの日のあれやこれやが枇杷いろになる
戦没といふ死、無数の穴のごとし樹影をゆらし夜の風ふく
夏帽子買はうか白い七月は灯台のやうにさびしい頭
まんぢゆうを割つて食べつつ今年も半分過ぎててもいごとする

木畑紀子 京都

あさあさにスズメの子らに催促をされてうれしや餌やりの姿
ほのぼのと見てをり餌を分けあへるやんちや雀とおつとり雉鳩
去年採りしあさがほの種ランダムに蒔きたり花のいろがたのしみ
自律機能おとろへるやゆらゆらと老いのからだがゆらぐ梅雨時
生薬といふは草木の生命のエキスにあらむ仁丹ふむ

島田暉 神奈川

サーファーをひとりさらひて引き潮はゴビの砂漠のやうに広がる
うつ心やらはむとして乗せられしヨットの先端荒波叩く
雨にぬれ風になぶられ立つ樹々は立ち続けるに非凡な魔力
黒鬼は一気に黒筆横なぐり空や大地を夕闇にせり
雨の降る高層ビルの間をゆく雨麻呂さまに導かれつつ

大松達知* 東京

ユードイとフジオカ、同じ人を指しながら会話は海に吸われる
食べたくはない宅配の寿司を食うそれが家族のすがたであれば
ラムダンの日には給食たべません、字幕は付けり彼の日本語に
黙るしかなくて黙っているまひる、なんで黙ってるんですか、だと
オスメスと読んでしまつてそれもよし西蘭花はわからないまま

津金規雄 神奈川

豪奢とはかくのごときか吸蜜する紋黄揚羽の真昼のはばたき
百合に来て百合を揺らして蜜を吸ふ四翅の大きさはたまやまず
日本産最大級の蝶の来てほしいままなる悦楽のさま
標本となれば目立たぬ後翅の紋 生の証か動きに動く
昼の月透ける薄さにかかりゐて地は本能のまぶしさに満つ

小 山 富紀子 京都

後 藤 美 子 北海道

ひらがなをぜんぶおぼえしおかつばに五色の短冊をよるとふるる
織姫にその夜の衣貸すといふ貸小袖とふならひやさしも
朝の田の露をあつめて七夕の墨をすりきと備中のひと
八日には七夕竹を鴨川へ流しに行きき 誰も咎めず
亡き君の残したまひし麻の袖のむかうに透ける世すずし

清 水 正 子 神奈川

死に変わり生まれかはりて虫となり研究室で夢を見る蜘蛛
個の意識ありて夢さへ見るといふ蜘蛛をムシケラと呼んではならぬ
蜘蛛の巣は六角形が基本らしい宇宙力学さながらによし
カンダタの邪心で切れし蜘蛛の糸けさ羽根雲となりて浮きをり
リピングで冬を越したる小さき蜘蛛この頃みねば少しさびしい

小 嶋 一 郎 佐賀

退院後自宅療養の名のもとに時溜むること過ぐすひと月
仰向けに寝るは苦手のこれの身も入院二十日馴れてしまひぬ
夜食後の葉を昼に飲み違へ何事もなし長きひと日は
太息を二度ほど吐きて身を起こし臓腑の目覚め今朝もみちびく
退院ののちも朝夕飲みつづく錠剤ぞあお馴れてしまひぬ

道内の採卵鶏の二割超殺処分され卵払底

入荷時刻貼られて並ぶ人の列鶏卵不足今日も続けり

「おひとりさま一ケース」とある卵の棚賞味期限を確かめて買ふ
手軽、安価、栄養に富むと今更に卵を求めて集ふ人々

福 士 り か 青森

手持ちレシビ多からず今夜は卵とぢやや甘めなる味付けにせん

花占ひのやうな逡巡よーじやの脂とり紙捨てるか否か

四十五リットル入りのゴミ袋積み上げ積み上げ無限断捨離

抽斗から出せば増殖すると知るタイツ、靴下、ハンカチの山

ビデオテープすべて捨て捨てれば「おっかあが映ってたんだ」と父が寂しむ
一階に四部屋二階に四部屋のこの家につかひと住むこと

藤 野 早 苗 福岡

二十五の娘と九十一の母はざまでわたしはわたしを生きる

針生姜せんばん乗せて冷やつこわが喉下る時を待ちをり

看取りへと向かふ高速道路加速するエンジン音が子宮に響く

タラバガニ食めば思ほゆわたくしは誰かの子を産む器にあらず

『赤光』を読めば思はゆたらちねを看しは無名のをみななりけむ

風 間 博 夫 千葉

血の出口わが身にありぬさらさらの血となるゆゑに出でゆく鼻血

一時間過ぎねど小水もよほしぬ前立腺肥大治療薬を飲んでゐるのに

万有引力うたふ谷川俊太郎「ひき合う孤独の力」とうたふ

父、母のすでに亡き家「ただいま」と言ふはさみしい言はぬさみしい

青葉闇馬酔木徒し身あづさゆみへつるみへつるつるの旨！ 冷やし麵

田中愛子 埼玉

駅までの道すぢ問はれ老婦人と共にあゆめりご縁と言ひて
揚げ雲雀 しあはせだから笑ふのではなくて笑ふからしあはせなのよ
デザート の黒蜜だんごしんと冷え正午を待たずお昼にしたり
九日目に郷土力士は負け越してただ蒸し暑し名古屋場所はも
白星をときに分け合ふもよきものをふるさとの名を負へる力士ら

橘 芳 園 新潟

信厚き京の門徒の親もちて越後の寺に嫁ぎきし母
寺継ぐを厭へるわれがもととなり祖母になじられてをりたりし母
京都より越後の寺に嫁ぎきし母泣かせたりわが還俗は
結婚し寺を出むとの約束を四十二年経てわれははたしぬ
父母にこたへむ僧にならむとするころと僧忘むころに揺れき

水 上 比呂美 東京

元町で待ち合はせなの渋谷からみなとみらい線特快でゆく
水鳥が水呑むやうにのど反らす眠剤ひとつ呑みくだすとき
呑むだけで墮胎のできる薬あり魔女にはあらず(国)が認めぬ
アスピリン、赤チン、ホウ酸、絆創膏入りをりき昭和の薬箱
しらうをが煮干しになつたと夫言へり五十年間水仕のおよび

鈴木竹志 愛知

厄介な世となりゆくかセルフレジ巷に蔓延りうつたうしいぞ
老人をためすごとくに鎮座するセルフレジとは憎き奴かな
セルフレジ増えて苛々募らせる何せ機械に舐められ放題
なにゆゑに機械に指示され金銭を支払ふ羽目にわれら陥る
店員の目に蔑みを感じつつわれ立ち向かふセルフレジ奴に

原賀環子 東京

督促状三万円のたしかに先づはビールを飲んでをりけり
家ぢゆうの家具に赤紙貼られる古き映画をふいに思へる
身心の経年劣化ひといきに加速させたり督促状は
六月はおとなしかつたわが薔薇の苔つぎつぎひらく七月
連載を日々欠かさず読んでなほ『白鶴亮翹』新刊を買ふ

大野英子 福岡

玄関の短き段を掃きながら思ひぬ父母の往き来せし日々
重責を終へた梅の木さはさはとあをばを初夏の風にゆだねる
一笑もなくても豊かな梅しごとあるけふ夕日と月が出合へる
うすやみの廊下の隅にあかねさす紫蘇に漬かつた梅たちが待つ
暗闇をひととき照らす蚊取りの香やがてわたしを眠りに誘ふ

松尾祥子 東京

ひとときを介護と育児放たれて姉と来たりぬ南清里
朝採れのコリンキー、ケール、プチベール食めば喜ぶ五臓六腑が
雲の上に夏富士見えて田を渡る風にゆつくり両腕ひらく
梅雨明けの前に孫よりもらひたるRSウイルスなかなか去らず
しなやかな力が欲しい台風にもみしだかれて立てる棕櫚の木

鈴木千登世 山口

広辞苑第七版に載りをらぬ禍つ神線状降水帯
緊急のエリアメールが真夜中にスマホ数ぶんわんわんと来つ
西窓を叩く大雨の滝落とし瞑り耐へをり獣もわれも
吹き降りが漏電を呼ぶ連鎖にてヒューズ飛びばんとブレーカー落つ
深井戸の底よりあふるる山水のきらめきつつの四十メーター

小田部 雅子 静岡

斉藤 梢 宮城

息をせず脈もなき猫、なでなでなでまたなで待つ。いのち還りぬ
四肢硬く冷たき猫にじわじわと戻るぬくもり ぬくもりは生
ヒトならば百歳の猫ほんわりと抱いて医師言ふ「いい子でちゅね」
夜の畑にころがるスイカ巨大なる黒皮スイカ九つの闇
去年の夏ほどには見ざる向日葵よ終はりなほほみえざるものを

冷蔵庫が最後の仕事する夜の大き唸りをかなしみて聞く
現実から少し離れてみるためにじつと見てゐるあぢさゐと雨
父の老いにまつたはなくて夏の来て父はぱたんと歩けなくなる
病院に行く時だけに靴をはく 靴をはきても父は歩けず
誕生日に「死にたくなる」と言ふ父よ あなたの声を聞けてうれしい

詩歌句レッスン

●小島ゆかり

思い切つて語順を大転換

《新聞転載》

今回は、語順の大転換という提案です。
内容は変えたくないけれど、どうしてもリズムがごたごたする。あるいは、なんとなく説明調になってしまふ。表現がいまひとつしっくりしない。そんなときはありませんか。一部分にこだわらず、全体を見渡し、うアイデアはどうでしょう。

今回も、短歌教室や大会などでじつさいにアドバイスした作品をご紹介します。

《電柱に貼らるる写真は老女なり行方不明の犬猫でなく》

します。主観を述べず、事実だけを詠んだところが、簡潔でいいと思いますが、「行方不明」が「犬猫」だけにかかっていることが気になります。

《犬猫でなく老女なり電柱に貼らるる行方不明の写真》
(添削後)

歌の中心を二句切れでくつきりと表現するほうが、この歌を生かすのではないでしょうか。

なるのは、まんなかあたりのリズムの滞り。
《亀戸の大根料理で盛り上がる恒例の二中OB会》
(添削後)

いわゆる倒置法です。せっかくの心弾みを、より自然に伝えたいですね。

《山茶花の花咲く木より飛び立つは去年も来たりし目白の番か》

目白は、枝移りの様子もかわいらしい小鳥。春から夏に、多くは番で見かけたいへん身近な鳥。そんな目白を詠んだ、魅力的な一首です。初句から結句までずっと続いてしまふリズムが、少し重たい印象です。

《あれは去年の番かどうか山茶花の花咲く木より飛び立つ目白》
(添削後)

ときには思い切つて、語順の大転換を。